説教要旨　「必死に探し回る神さま」

ルカによる福音書１５章１～１０節

話を聞こうとして近寄って来る徴税人や罪人を避けることなく、自分の仲間として迎え入れ、食事まで共にされるイエス様を見て、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、“汚れ”を避けようとしないイエス様の態度を“義しい人”にあるまじき行為として批判しました。この批判に答える形で有名な“見失われた羊”のたとえが語られました。

「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。」（4 節）

羊飼いが一匹の羊を捜しに行くのは、彼が特別に愛に満ちた慈悲深い人だからではありません。その羊が自分のものであり、価値あるものだからです。

「見よ、わたしは自分自身の群れを探し出し、彼らの世話をする。牧者が、自分の羊がちりぢりになっているときに、その群れを探すように、わたしは自分の羊を探す」。（エゼキエル書 34:11-12）

聖書に精通していたであろうファリサイ派の人々や律法学者たちは、見失った羊のたとえを聞いて、このエゼキエル書の預言の言葉を思い起こしたことでしょう。神様は、ご自分の大切なものが失われていくのを、まあいいや、と放っておくのではなく、捜しに来て、見つけ出し、ご自分のもとに取り戻そうとなさるお方なのだ、と。

このたとえ話が語っているのは、そのような迷い出た羊である私たち一人一人のことを、神様が、ご自分のものとして大切に思って下さり、捜しに来て、見つけ出し、ご自分のもとに取り戻そうとして下さるのだ、ということです。

神様はそのために、ご自分の独り子をこの世に遣わして下さいました。神様の独り子イエス・キリストが、迷子になってしまっている私たちを捜し出し、見つけ出して神様のもとに連れ帰って下さる本当の羊飼いとして、人間となってこの世きてくださったのです。

（２０１９・１０・２７　説教者：稲垣真実）